

大学図書館におけるレファレンス・コレクション の数量的分析

社会教育学研究室

長 沢 雅 男 ・ 三 浦 逸 雄 ・ 戸 田 慎 一

The Quantitative Analysis of the Reference Collection in a University Library

Masao NAGASAWA, Itsuo MIURA and Shin'ichi TODA

A total of 2867 foreign reference materials included in the reference collection of the International Christian University Library were quantitatively analysed as a means of evaluating the characteristics of the collection.

After dividing the reference materials into two categories, non-serials and serials, the following aspects were examined respectively: types of reference books; subject fields covered; nationalities of publishers; languages used; dates of publication; volumes of individual titles; editions; types of editors; types of publishers; and for serial reference materials, birth and death date; frequency; and holdings of the library.

Lastly, individual titles in the collection were checked against the titles listed in Sheehy's *Guide to Reference Books* (9th ed.) to see the rate of holdings as of July 1980.

Findings are presented in a series of tables and graphs.

はじめに

1977年に、全国の国公立大学から、5学部以上からなる大学（国立28、公立1、私立24）を選び、その中央館ないしそれに相当する図書館を対象にして、参考業務の実態を調査した¹⁾。それは、いわば実態調査の予備作業であって、参考業務の実施状況、組織、職員、施設、業務の範囲、参考質問および参考図書にわたって、できるだけ多くの問題点を抽出することを意図したものであった。

したがって、今回は、77年の実態調査の結果を踏まえて、特に参考図書とそのコレクションの問題に焦点を合わせて調査を行なった。77年の調査によれば、レファレンス・コレクションについて、多くの問題があることが判明したが、とりわけ次の諸点が重要な問題点として指摘できたからである。すなわち、第1に、大多数の大学図書館では、参考図書を別置しているが、30%以上は部分的別置であり、全面的な独立のコレクションを構築するだけの条件が整備されていない。第2に、一般に、コレ

クションの規模が小さく、開架の和書は2,000~6,000冊規模のところが多く（国立で74%、私立で58%）、開架の洋書では3,000冊以下のところに50%以上が集中し、しかも個々の館によって較差が大きい。第3に、参考図書購入のための予算が決められていない図書館がかなり多く（国立で36%、私立で54%）、決まっていたとしても、その予算額は不足（47%）ないし極めて不十分（11%）という回答が得られた。そのために、コレクションの充実度についての質問に対しても、「不足である」とするものが多く（国立で70%、私立で50%）、さらに「貧弱である」とするものも少なくない²⁾。

こうした問題を抱えているにもかかわらず、各図書館の当事者の間でのレファレンス・コレクションの構築への取り組みに積極性を欠くきらいがあるのはどのような事情によるのであろうか。調査結果では、参考業務の重要性は十分認識されているようであるが³⁾、その業務の基盤整備ともいべきコレクションの構築維持には十分配慮されていないところに問題がある。

その理由として、参考図書に対する利用者の要求がと

らえにくいことがあげられようが、主要な原因は、大学図書館にとって基本的なレファレンス・コレクションは如何にあるべきか、その収集の目的および方針が不明確であるところに伏在していると考えられる。

わが国では、大学図書館のレファレンス・コレクションの最適規模について、これまで研究されて来なかったし、そのための基礎的調査にも見るべきものはない。

アメリカでも、「即答質問以上のことをこなそうとする図書館は少なくとも5,000冊の参考図書が必要である」⁴⁾とか、13の大学図書館を調査し、「別置された書誌コレクション以外の、一般のレファレンス・コレクションの規模は、およそ1万冊から3万2,000冊までのところに分布し、2万冊から3万冊までに最も多く集中している」⁵⁾といった報告は散見されるが、コレクションの最適規模についての研究は乏しい。

一つには、大学図書館それぞれが置かれている条件の違いによって、一般に共通する方針を打ち出しにくいことによるものと思われる。例えば、レファレンス・コレクションの収集方針の策定に当たって考慮すべき要素を検討した論文⁶⁾でも、コレクションの最適規模について言及してはいるが、その「規模に絶対的な限定を設けるべきではない。一般的要求、カリキュラムの変化、各学問分野の学生数が、コレクションの中での主題領域の相対的な増加率を決める上での指針となる」⁷⁾と述べるだけにとどめている。

コレクションの最適規模を考えるに当たっては、このほかにもさまざまな要素を考慮しなければならないことはいうまでもない。しかし、本調査では、手はじめに、まず特定の大学図書館を選んで、そのレファレンス・コレクションの規模、特性などの実態をとらえることにした。そうすることによって、今後のコレクション調査の指針も得られるからである。

I 調査対象と方法

A 調査対象館

今回は、今後幾つかの大学図書館を対象に行うことを予定している調査の第一次に相当する。したがって、調査対象館の選定には慎重を期し、最終的に国際基督教大学(以下ICUと略す)の図書館を決定した。

ICUは1949年に創立され、教養学部を設けて開学されたのが1953年である。学部は人文科学、社会科学、理学、語学、教育学の5学科、大学院は教育学、行政学、比較文化の各研究科で、学生総数は約2,000名で比較的規模は小さいが、ユニークな大学として知られている。

その図書館は1981年3月現在、24万5,000冊以上の蔵書を擁し、かなり充実した業務を展開している。特に、図書館の創設以来、参考業務に力を注ぎ、大規模大学の図書館に劣らないほどの参考質問処理件数をこなしている⁸⁾。

したがって、和洋の参考図書(単行書)も、それぞれ4,744点(1981年6月現在)、2,491点(1980年7月現在)で、5学部以上の規模の大学の中央館の平均冊数に匹敵する⁹⁾。

参考図書の予算は、大規模大学の図書館でも予め決まっていなかったために、不安定なところが少なくないが、ICU図書館では、1978年に757万6,520円、1979年に1,034万7,590円が充てられている。したがって、参考図書の年間受入冊数も1978年が和書491冊、洋書351冊、1979年が和書536冊、洋書592冊となっている。この数字は5学部以上の規模の大学の中央館の平均を上回っている¹⁰⁾。

以上のような諸点を考慮して、同館のレファレンス・コレクションを選んで調査することにした。

B 調査対象コレクション

ICU図書館が、1980年7月末現在で収集整理した参考図書のうち、今回調査対象にしたのは洋書のみである。

同館は全館開架制を採り、参考図書はレファレンス・コレクションとして和洋混架で、一般図書とは別置されている。したがって、ここに参考図書というのは、同館で参考図書扱いにしているものであって、参考図書とはいえない種類のものも若干含まれている。また、逆に、参考図書であっても、一般書扱いにされて、レファレンス・コレクションからはずされているものもあろう。しかし、こうした例外的なケースは極めてわずかであり、コレクションを対象とする今回の調査には支障はない。

あわせて、断わっておかなければならないことは、レファレンス・コレクションの調査とはいっても、洋書のみを対象にしている点である。

和洋混架のコレクションを調査する場合、洋書のみを調査対象とするのは問題があろう。一つのコレクションであれば、使用言語のいかんを問わず、取書全体にわたって調査することが望ましいのはいうまでもない。

しかし、今後、幾つかの大学図書館のレファレンス・コレクションの比較調査に拡げて行く立場からすると、和書を調査対象に含めることは必ずしも得策ではない。和書データの電算機処理において、漢字処理その他の技術的な問題が加わること、また、和書を含めたとしても、参考業務の盛んな大学図書館に関する限り、所蔵タイトルに顕著な差はなく、処理点数が増える割には、コレクションの特徴がとらえにくいこと、などの理由か

ら、和書は割愛し、ひとまず洋書のみを対象にすることにした。

ところで、洋書とは何か。一般に、和漢書と区別して、西洋の書という意味で洋書ということばが用いられるが、本調査では原則的に次のように決めることにした。すなわち、本文の使用言語が日本語、中国語、朝鮮語等の東洋諸語以外の言語の図書を洋書とする。したがって、日本および東洋の諸国で刊行された図書であっても、欧米諸語のいずれかで書かれた図書であるならば、洋書として扱うことにした。ただし、そのような図書の場合であっても、日本語との対訳辞書は洋書とはしないことにした。

C 単行書と逐次刊行物

調査にさきだち、上述の調査対象を単行書と逐次刊行物とに大別することにした。これらは刊行形式によって、おのずから参考図書としての特徴を異にしているので、調査項目をその特徴に応じて変えた方がより適切な調査結果が得られると考えたからである。

ここに単行書というのは、1冊ないし2冊以上で完結する出版物である。通常、その冊数は予め決まっており、予定されていた冊数が刊行されることによって完結する。なお、この種の図書であっても、謄写版印刷のもの、49ページ未満の小冊子は除外することにした。

他方、逐次刊行物は、終期を予定しないで継続的に刊行することを意図した分冊形式の出版物であり、各分冊には一連の巻号数や年号月号等が与えられているものをいう。ただし、単行書との類別に際して、逐次刊行物としての要件が自明でないものについて、二次資料を利用して判断するとともに、所蔵状況をも勘案して、いずれかに区分した。

D 調査単位

単行書は、いわゆる書誌的単位をもって調査単位を定めた。したがって、2冊以上からなる参考図書は完結した全巻をもって1点と数えることを原則とする。ただし、続刊中のものは調査単位として算定するが、後述の巻数調査には含めないものとする。

また、多巻もので、欠本巻数が全巻の半分以上の場合には、当該の図書は所蔵していないものと見なした。ただし、独立性の強いものについては、その限りではない。

なお、本版が完結した後に刊行された追補版、付録等の別冊は、本版を所蔵しているならば当然収集されているものと想定して、調査単位としても、巻数のうちにも算入しなかった。この点で、幾分厳密性を欠いている。

さらに、複本のあるものは何点所蔵していても、すべて1点として数えた。こうした扱い方をしたため、この調査で得られた参考図書の総点数は、ICU図書館の所蔵実数を幾分下回っている。

他方、逐次刊行物も、その書誌的単位を調査単位とした。したがって、巻号等の表示が継続していても、改題されたならば別個のものとして扱うことにした。なお、軽微な改題はその限りでない。

単行書と逐次刊行物に共通するが、その複製（復刻）版の場合、原版と同一のものとみなし、複製の際に、改題したもの、増補したもの、部分的に複製したものは、独立の単位として扱った。

E データの作成と処理

作業にあたっては、単行書用と逐次刊行物用の2種類のデータシート（付録参照）を作成し、このデータシートに閲覧目録カードの記述に基づいてデータを記入した。ただし、目録カードの記述だけでは不十分な場合、現物や各種の二次資料を参考にした。

このデータシートから機械可読ファイルを作製し、このファイルを用いて各種の集計やリストの編集を行なった。ただし、本稿で対象とするのはデータシートの分析項目部分（単行書用では1～13の項目、逐次刊行物用では1～11の項目）である。なお、集計・分析には東京大学大型計算機センターのHITAC M-200Hを使用し、プログラムはSPSS統計パッケージを用いた。

II ICU図書館の蔵書の構成

本調査の直接の対象であるレファレンス・コレクション（洋書）を分析するにさきだち、ICU図書館の蔵書全体の特徴を数量面から把握し、そこに占める参考図書の位置を明らかにしておきたい。

第1表は、1981年3月31日現在における参考図書を除いたICU蔵書（単行書）を日本十進分類法（以下NDCと略す）の主類により10区分したものである。これによると、和書に関しては300（社会科学）が全体の32.3%と断然群を抜いており、反対に500（工学）と600（産業）はいずれも3%にも満たない。また、洋書についても同様に、300の比率が最も高く、500と600は共に2%以下にとどまっている。

各主類における和書と洋書を比較すると、100（哲学）、400（自然科学）、800（語学）、900（文学）の4分野で洋書が和書を上回っている。800では外国語、900では外国文学が相当部分を占めているので、洋書が多くなるの

第1表 蔵書構成(単行書)

N 主	D 類	C 類	和 書 A	洋 書 B	全 蔵書 C=A+B	A/C×100	B/C×100
000	(総記)		8,344 (8.3%)	4,768 (5.0%)	13,112 (6.7%)	63.6%	36.4%
100	(哲学)		10,744 (10.6)	15,557 (16.2)	26,301 (13.3)	40.9	59.1
200	(歴史)		12,558 (12.4)	10,015 (10.4)	22,573 (11.4)	55.6	44.4
300	(社会科学)		32,683 (32.3)	26,618 (27.7)	59,301 (30.1)	55.1	44.9
400	(自然科学)		8,732 (8.6)	10,380 (10.8)	19,112 (9.7)	45.7	54.3
500	(技術)		2,045 (2.0)	1,092 (1.2)	3,137 (1.6)	65.2	34.8
600	(産業)		2,480 (2.5)	1,942 (2.0)	4,422 (2.2)	56.1	43.9
700	(芸術)		5,220 (5.2)	3,781 (3.9)	9,001 (4.6)	58.0	42.0
800	(言語)		3,698 (3.7)	6,545 (6.8)	10,243 (5.2)	36.1	63.9
900	(文学)		14,553 (14.4)	15,374 (16.0)	29,927 (15.2)	48.6	51.4
計			101,057(100.0)	96,072(100.0)	197,129(100.0)	51.3	48.7

注：参考図書を除く 単位：冊数

第2表 ICU レファレンス・コレクションの構成(単行書)

N 主	D 類	C 類	参考図書(和) A	参考図書(洋) B	全参考図書 C=A+B	和書総計 D	洋書総計 E	全蔵書 F=D+E	A/C ×100	B/C ×100	A/D ×100	B/E ×100	C/F ×100
000			920(19.4)	272(10.9)	1,192(16.5)	9,264	5,040	14,304	77.2	22.8	9.9	5.4	8.3
100			249(5.2)	232(9.3)	481(6.6)	10,993	15,789	26,782	51.8	48.2	2.3	1.5	1.8
200			576(12.1)	439(17.6)	1,015(14.0)	13,134	10,454	23,588	56.7	43.3	4.4	4.2	4.3
300			1,218(25.7)	446(17.9)	1,664(23.0)	33,901	27,064	60,965	73.2	26.8	3.6	1.6	2.7
400			354(7.5)	133(5.3)	487(6.7)	9,086	10,513	19,599	72.7	27.3	3.9	1.3	2.5
500			211(4.5)	22(0.9)	233(3.2)	2,256	1,114	3,370	90.6	9.4	9.4	2.0	6.9
600			186(3.9)	29(1.2)	215(3.0)	2,666	1,971	4,637	86.5	13.5	7.0	1.5	4.6
700			232(4.9)	113(4.5)	345(4.8)	5,452	3,894	9,346	67.2	32.8	4.3	2.9	3.7
800			500(10.5)	562(22.6)	1,062(14.7)	4,198	7,107	11,305	47.1	52.9	11.9	7.9	9.4
900			298(6.3)	243(9.8)	541(7.5)	14,851	15,617	30,468	55.1	44.9	2.0	1.6	1.8
計			4,744(100.0)	2,491(100.0)	7,235(100.0)	105,801	98,563	204,364	65.6	34.4	4.5	2.5	3.5

注：和書総計 D=A+一般和書，洋書総計 E=B+一般洋書 単位：冊数 参考図書は点数

は十分に納得できるところである。しかし、100や400で洋書が多いのはどのような理由によるものであろうか。この点を検討するため、100と400を細分した主綱レベルでみたところ、前者においては130(西洋哲学)、140(心理学)、190(キリスト教)の3分野の洋書比率がそれぞれ60%を越えていた。特に130の洋書は70%近くを占めている。400では、410(数学)、460(生物学)、480(動物学)の3分野の洋書がそれぞれ60%以上を占めている。因みに、主綱レベルにおける和書と洋書の冊数には強い相関が認められた(相関係数0.937)。

次に、参考図書の全体的構成に目を転じよう。1980年7月末日現在の和洋レファレンス・コレクションの構成

をNDC主類別に示したものが第2表である。各主類における和書の参考図書についてみると、300が最も多く25.7%を占め、これに000(総記)、200(歴史)、800が10%台で続いている。同じく洋書の場合は、800が22.6%で最も高く、以下000、200、300が続く。このような和洋参考図書の構成は、第1表の一般図書の構成とは明らかに異なる点が認められる。特に、和書では000と900、洋書では300と800における参考図書と一般図書との比率に大きな差がある。この主綱レベルでの参考図書点数と一般図書冊数に関しては、和書の方が洋書よりも相関が高い(相関係数和書0.745、洋書0.532)。

参考図書全体に占める和書と洋書の比率はそれぞれ

65.6%と34.4%である。これによって和書が洋書の2倍近くを占めており、その差が一般図書における和洋の差よりも大きいことがわかる。また、各主類についてみると、洋書の参考図書が過半数を占めているのは800だけである。これは外国語の言語辞書が800の参考図書の相当部分を占めていることによるものと推測される。洋書が40%を越えているのは、100,200,900の3分野である。

上述の結果を第1表の結果と対比してみると、一般図書と参考図書における洋書の多い分野がほぼ一致していることがわかる。ただし、各主類の一般図書冊数と参考図書点数には、さほど高い相関は認められなかった(相関係数0.681)。

和書全体に占める和書の参考図書の比率は5%以下、同じく洋書全体に占める洋書のそれは3%以下である。この比率を主類レベルでみると、一般的に洋書より和書の比率の方が高く、特に和書では000,600,800がそれぞれ10%前後、洋書では800の約8%であることはこれらの分野における参考図書の出版点数の多さを反映しているものといえよう。

なお、全蔵書中に占める全参考図書の比率は、全体で3.5%であるが、主類別にみると、800の9.4%が最も高く、000の8.3%がこれに続く。一番低いのは100と200で共に1.8%である。

以上、ICU蔵書を一般図書と参考図書に分けて各々の構成を数量面から概観してきたが、厳密な意味では一般図書のうちにも一般書架に移された参考図書が若干含まれているはずであるから、各比率は多少変わってこよう。しかし、本調査では、レファレンス・コレクションとして別置構成された参考図書類を対象としているので、この点は無視しても構わないであろう。

Ⅲ 参考図書(洋書)の分析結果

前章でICUの全蔵書における参考図書の量的比率を概観したが、本章では参考図書のうち洋書について、単行書(2,491点)と逐次刊行物(376点)に分けて、その分析結果を明らかにしたい。

A 単行書

1. 参考図書のタイプ

まず、どのようなタイプの参考図書があるかを明らかにするために、次のような各タイプの定義(逐次刊行のそれも含む)に準拠し、参考図書を個別に点検した上で類別することにした。すなわち、

(1) 抄録(Abstracts)

図書、報告書、雑誌論文・記事等の内容を要約し、書誌的事項を添えて配列した(継続的な)出版物。

(2) 地図帳(Atlases)

地図を主体とし、それに説明や索引を付して冊子体にまとめた出版物。各種の主題地図を含む。

(3) 主題文献案内(Bibliographic guides)

文献探索、図書館利用、論文作成等について説明し、基本的な参考図書の解題や選択的書誌を付した特定分野の研究入門書。

(4) 書誌(Bibliographies)

図書、雑誌、その他の記録資料の書誌的事項を一定の利用目的に合わせて配列したリスト。注解ないし解題を加えたものを含む。

(5) 人名事典(Biographical dictionaries)

多数の人物の経歴や業績などを記述・解説したもの。記述が詳細で登載者数の少ない伝記集・叢書形式のもの、記述が簡潔で登載者数の多い人物事典形式のものを含む。

(6) カタログ(Catalogs)

商品、備品、器具などの物品を記録ないしは解説して、一定の体系に従って配列したリスト。

(7) 年表(Chronological tables)

出来事、データ、事象などの情報を発生ないし出現の年代順に配列し、表形式にまとめて、一覧できるように編集したもの。

(8) 用語索引(Concordances)

聖書あるいは特定著者の著作(単数もしくは複数)に含まれている語の索引であり、本文における語の所在を指示するとともに、その文脈を付している。語の定義を付していることもある。

(9) 辞書・事典(Dictionaries)

特定言語における言葉あるいは特定主題分野の用語を一定の順序(アルファベット順、体系順、等)に配列し、その発音、意味、内容などを解説している図書。

(10) 名鑑(Directories)

団体・機関名(官庁、企業、学校、大学、研究所等)を見出し語とするリストであり、所在地、組織、業務、職員、沿革などのデータを記載している。

(11) 百科事典(Encyclopedias)

知識の全分野にわたる主題に関する項目を解説し、通常、アルファベット順に配列した図書。

(12) 地名事典(Gazetteers)

市町村、河川、湖沼等の各種の地名を見出し語とし、発音、位置、規模、地理、歴史、経済、政治関係の解説を付したもの。

(13) 用語集 (Glossaries)

難解語, 古語, 特殊用語, 専門用語, 方言, その他の特定領域の用語を一定の順序 (通常, アルファベット順) に配列したリスト. ただし, 語義の説明が付いているものは辞書・事典に含める.

(14) 便覧 (Handbooks)

特定主題に関する基本的な情報 (事実や数字のデータ) を簡潔に記載した図書. 通常, 簡便な利用を目的とする.

(15) 図鑑 (Illustrated books)

主に写真や絵を用いて, 事物をわかりやすく説明したもの. 通常, 網目順に配列し, 巻末に名称の索引を付したものが多く.

(16) 索引 (Indexes)

特定著作 (単数あるいは複数) の内容索引. 記事論文索引は書誌に含める.

(17) 蔵書目録 (Library catalogs)

ひとつの図書館の蔵書について, その書誌の事項や請求記号などを記載したもの.

(18) 引用句辞書 (Quotation books)

散文や詩歌からの引用語句を集め, 辞書形式に編集したもの. 通常, 著者名あるいは主題のアルファベット順, もしくは著者の生年順に配列されている.

(19) 資料集 (Source books)

歴史, 文学, 芸術, 宗教, 政治等に関する基本資料・記録類の集成. ただし, 参考図書とみなせるものに限定する.

(20) 統計集 (Statistics)

統計的数値を項目別に分類・整理した数値データの集成. ただし, 統計年鑑は年鑑に含める.

(21) 数表 (Tables)

文字, 数字, 記号等を表形式でまとめたもの.

(22) シソーラス (Thesauri)

情報検索において, 原文献で使われている自然言語を検索システムの統制言語 (検索語) に翻訳するために用いる語彙集.

(23) 旅行案内書 (Travel guides)

旅行者に関心のある事項 (旅程, 旅費, 宿泊施設, 名勝旧跡等) に関する情報を提供する案内書.

(24) 総合目録 (Union catalogs)

複数の図書館の蔵書を基礎とする書誌の事項を一つの目録組織のもとに編成し, それぞれの所在指示を示した目録.

(25) 年鑑 (Yearbooks)

1年間にわたる活動や展望を簡潔に記載したもの.

第3表 参考図書タイプ

タイプ	点数	%
辞書・事典	909	36.5
書誌	630	25.3
名鑑	142	5.7
便覧	128	5.1
人名事典	116	4.7
地図帳	101	4.1
主題文献案内	81	3.3
蔵書目録	51	2.0
用語索引	49	2.0
用語集	46	1.8
旅行案内書	35	1.4
百科事典	28	1.0
引用句辞書	26	1.0
統計集	22	0.9
索引表	19	0.8
数表	18	0.7
図鑑	15	0.6
資料集	14	0.6
総合目録	14	0.6
地名事典	13	0.5
シソーラス	12	0.5
年表	9	0.4
カタログ	8	0.3
その他	5	0.2
計	2,491	100.0

通常, 年1回の刊行で, 記述形式あるいは統計形式をとる.

参考図書のなかには, 書誌に人名事典を加えたもの, 便覧と用語集からなるものなど, 二つ以上のタイプの特徴を兼ね備えたものがある. この種の参考図書については, 量的比率の高い方に類別することを原則とし, 凡例, 序文等も参考にして, いずれかに類別することにした.

その結果を点数の多い順に並べたのが第3表である. この表によれば, 辞書・事典と書誌の二つが飛び抜けており, 両方で全体の約60%を占めている. この二つ以外のタイプの比率は一律に低いが, 予想より点数が少なかったのは便覧であり, 反対に意外に多かったのは地図帳である.

上掲の25のタイプを四つの大きなグループ, すなわち書誌類 (書誌, 主題文献案内, 蔵書目録, 総合目録), 人名事典類 (人名事典, 名鑑), 辞書類 (辞書・事典, 百科事典, 用語集), 「その他」に大別して, その比率を

第4表 主題分野 (NDC)

NDC主類	点数	%
000	272	10.9
100	232	9.3
200	439	17.6
300	446	17.9
400	133	5.3
500	22	0.9
600	29	1.2
700	113	4.5
800	562	22.6
900	243	9.8
計	2,491	100.0

第5表 100点以上の主題分野

NDC主綱	点数	全体に占める比率
830 (英語)	174	7.0%
370 (教育)	140	5.6
190 (キリスト教)	134	5.4
290 (地理)	110	4.5
020 (図書・書誌学)	108	4.3
220 (歴史・アジア)	108	4.3
930 (英米文学)	102	4.1

算出したところ、それぞれ 31.1%、10.4%、39.5%、19.0%という結果が得られた。この結果から明らかのように、ほぼ半数がいわゆる事実に関するタイプであり、これに書誌類を加えたものがICUレファレンス・コレクション(単行書)の中核を形成している。

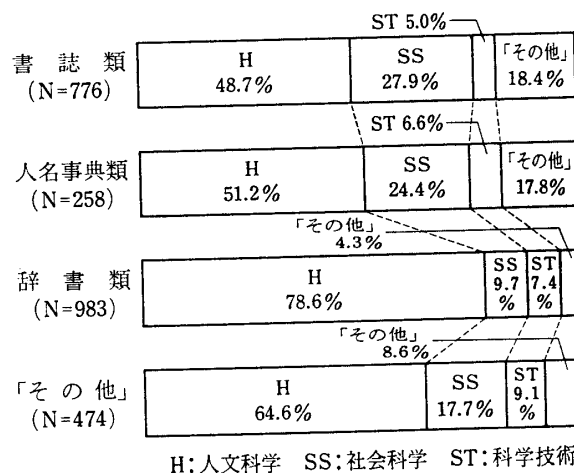
2. 主題分野

次に、このコレクションの主題面における特徴はどうか。この点を明らかにするために、NDC主類におけるコレクションの構成を示したのが第4表である。この表によると、最も点数が多い分野は800で、そのあとに300,200が続いている。一方、500と600の比率は1%ときわめて低くなっている。

このようなコレクションの特徴は、さらに主綱レベルに区分した上で検討してみると一層顕著になる。すなわち、第5表に掲げたように、100点以上の参考図書をもつ分野が七つあることが確認できる。これらの分野は、一般図書(洋書)についても他分野に比べて高い比率で収集が行われていることが確かめられている。

逆に主類をより大きくまとめた場合はどうかであろうか。そこで、便宜上、主類を四つの分野、すなわち人文

第1図 参考図書タイプ別主題分野



科学(100, 200, 700, 800を含む)、社会科学(300, 670(商業), 680(交通), 690(通信)を含む)、科学技術(400, 500, 600の残りを含む)、「その他」(000を含む)にまとめ、その比率を求めると、それぞれ 63.8%、18.4%、6.9%、10.9%となる。この結果から、人文科学の参考図書は比較的充実しているが、社会科学がやや弱く、科学技術は弱体であるといえるのではなからうか。

前述した参考図書の四つのタイプについて、これらの分野、すなわち人文科学(H)、社会科学(SS)、科学技術(ST)、「その他」がどのような比率を占めるのであろうか。この比率を示したのが第1図である。これをみると、辞書類における人文科学の約80%が目をつくが、その大半は言語辞書である。また、タイプ「その他」における人文科学(306点)の3分の1近くを地図帳(93点)が占めているのも特徴的である。同じくタイプ「その他」における社会科学(84点)では、便覧(48点)が第1位を占めている。

3. 出版国

参考図書の出版国の面で特徴がみられるだろうか。この点を明らかにするために、閲覧目録カードに記載されている出版地の属する国を現在の版図で分類し、それぞれの出版国とした。ただし、各参考図書の出版地が二か所以上にわたるときは、閲覧目録カードないしは現物点検によって、主たる出版国を一つ選ぶことにした。また、多巻もので出版地が二つ以上ある場合は、最新刊行のもの出版地の属する国を出版国とみなした。さらに復刻版は原本の出版地によった。こうして得たそれぞれの国の出版点数を示したのが第6表である。この表をみると、予期していた通りアメリカ合衆国の出版物が全体の半分近くを占めており、これにイギリスのものを加えると65%以上になる。

第6表 出版国

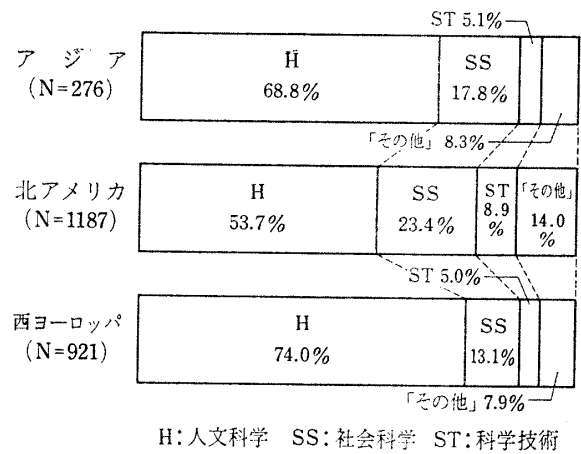
国名	点数	%
日本	166	6.7
韓国	8	0.3
中国	14	0.6
香港	14	0.6
フィリピン	11	0.4
インド	28	1.1
その他	35	1.4
アジア小計	276	11.1
アメリカ合衆国	1,172	47.2
カナダ	15	0.6
北アメリカ小計	1,187	47.8
イギリス	450	18.1
西ドイツ	174	7.0
スイス	25	1.0
フランス	185	7.5
ベルギー	7	0.3
オランダ	47	1.9
スペイン	5	0.2
イタリア	18	0.7
その他	10	0.4
西ヨーロッパ小計	921	37.1
北ヨーロッパ	15	0.6
ソ連	12	0.5
東ドイツ	46	1.8
その他	5	0.2
東欧・ソ連小計	63	2.5
オセアニア	19	0.8
ラテン・アメリカ	0	0.0
アフリカ	3	0.1
総計	2,484	100.0

注：出版国不明6点，出版国記載なし1点を除く

他に注目すべき点は、日本で出版された洋書扱いのものが予想外に多いこと、反面、ソ連出版のもの比率がきわめて低いこと、およびラテン・アメリカ諸国のものが皆無であることである。出版地を地域別にみると、当然のことながら北アメリカのものが最も多く、これに西ヨーロッパのものを加えると80%以上を占める。

ここで視点を変えて、日本を除いた出版国を西側先進国（北アメリカ、西ヨーロッパ、北ヨーロッパ、オセア

第2図 地域別主題分野



ニア), 開発途上国 (アジア, アフリカ, ラテン・アメリカ), 東欧・ソ連の3ブロックに分け, その比率をみると, 92.4%, 4.9%, 2.7%となり, 西側先進国への集中が一層顕著に現われる。

第2図は, 上位三つの地域 (アジア, 北アメリカ, 西ヨーロッパ) について, その主題構成を示したものである。いずれの地域においても人文科学の占める比率が高いのは当然のことながら, とくにアジアと西ヨーロッパでは70%前後と高くなっている。その内訳をみると語学関係がアジアの人文科学の3分の1, 西ヨーロッパのそれの2分の1を占めている。

第7表 参考図書タイプ別出版国

タイプ	第1位	第2位
辞書・事典	アメリカ(35.0%)	イギリス(25.6%)
地図帳	イギリス(29.7)	アメリカ(25.7)
蔵書目録	日本(49.0)	アメリカ(43.1)
用語集	フランス(26.7)	アメリカ(24.4)
旅行案内書	イギリス(60.0)	アメリカ(28.6)
百科事典	アメリカ(39.4)	フランス(21.4)
統計集	アメリカ(18.2)	日本(18.2)

さらに参考図書のタイプ別に, いずれの出版国のものが多いのか, その分布を調べてみると, ほとんどのタイプにわたってアメリカで出版されたものが第1位を占めている。そこで, アメリカで出版されたものが第1位ではあるが, その比率が比較的低い(40%以下)タイプ, およびアメリカ以外の国で出版されたものが第1位を占めているタイプのみについて, その第1位と第2位を示したのが第7表である。これによって, 蔵書目録の半分近くが日本の出版物であることがわかるが, それらの大部分は大学, その他の学術機関の洋書の蔵書目録であ

る。また、統計集でも日本で出版されたものがアメリカのそれと等しいが、その比率は小さく、20%を下回っている。

4. 使用言語

出版国によって、ある程度使用言語も決まってくるといえるが、参考図書の場合は必ずしも出版国の国語と一致しないもの、2か国語以上を使用しているものなどが少なくないので、次に、使用言語についても検討することにした。なお、使用言語の類別に際しては、本文、序文、凡例、目次、索引等を点検することによって判定したが、その結果、言語が2種類以上使用されている場合は、その言語を問わず、すべて「2か国語以上」として扱うことにした。この結果、参考図書の使用言語による分布を示す第8表が得られた。この表においては、書誌、索引、蔵書目録、総合目録の四つのタイプの参考図書が除かれている。これらは書誌的事項の記述からなるもので、言語区分をしても、あまり意味がないからである。この表をみると、やはり英語のものが圧倒的に多く、これにドイツ語とフランス語のものを加えると全体の約80%を占める。

第8表 使用言語

言語名	点数	%
英語	1,129	63.5
ドイツ語	135	7.6
フランス語	120	6.8
ギリシャ語	8	0.4
スペイン語	7	0.4
ロシア語	5	0.3
ラテン語	3	0.2
イタリア語	1	0.1
その他	11	0.6
2か国語以上	358	20.1
計	1,777	100.0

注：書誌類を除く

2か国語以上のものを別にすれば、上記3か国語以外の言語のものは、いずれも1%に満たない。特に出版点数に比して、ロシア語やスペイン語のものが少ない。

また、参考図書のタイプとの関連で使用言語の分布を調べたところ、各タイプいずれにおいても英語のものが半分以上を占めていた。

5. 刊年

参考図書の情報内容の新しさは、その刊行年の新しさと同様に深い。そこで、次に、刊年について調査することにした。同一の版次で、刊年が二つ以上ある場合は、

第9表 刊年

年代	点数	%
1810年以前	6	0.2
1830	5	0.2
1840	4	0.2
1850	4	0.2
1860	7	0.3
1870	8	0.3
1880	19	0.8
1890	26	1.0
1900	37	1.5
1910	40	1.6
1920	54	2.2
1930	93	3.7
1940	144	5.8
1950	608	24.4
1960	756	30.3
1970	647	26.0
不明	33	1.3
計	2,491	100.0

初刷りの年を採り、単なる複製ないし復刻版の場合には原本の刊年を採ることとした。また、2年以上にわたって刊行された多巻もの場合には、最初に刊行された巻の刊年を採った。

以上のような刊年の選び方によって集計し、10年区分の刊年分布を示したのが第9表である。最も古い刊年は1595年であるが、これは *Dictionarium latino lusitanicum* (Amacusa, Collegio iaponica societatis Iesu) の複製である。このような古い刊年のものには複製版あるいは復刻版が多く、1900年以前の刊年をもつ79点の半分近くがこの種のものである。その上、その79点中、60点までが辞書・事典であり、しかも言語辞書が大半を占めている。

刊年分布に関して、当該コレクションの特徴と考えられるのは、1950年以降のものが全体の約80%を占めていることである。また、1950年から1978年までの各年ごとの比率はおおよそ2.0%から3.5%の範囲に入る（ただし、1979年は例外的に0.9%）。

この結果から、大半の参考図書はICUが創立された後に刊行されたものであり、刊年が古いものも、多くは複製（復刻）版であることがわかる。つまり、ICUのレファレンス・コレクションは全体的に新しいといえるだろう。

6. 巻数

第10表 巻 数

巻 数	点 数	%
1	2,100	85.9
2	129	5.3
3	58	2.4
4	32	1.3
5	29	1.2
6 ~ 10	47	1.9
11 ~ 20	25	1.0
21 ~ 30	13	0.5
31 ~	12	0.5
計	2,445	100.0

注：統刊中の多巻もの（46点）を除く

参考図書には多巻ものが多いといわれているが、このような関心から、各参考図書について、書誌的単位としての巻数を数えることにした。なお、統刊中のものは、すでに巻数が確定している場合でも、不明扱いにしたので、この調査からは除かれている。

こうして得られた巻数の分布を表わしているのが第10表である。これによると、参考図書の大部分が1巻だけのものであり、これに2巻のものを加えると、90%を越える。さらに範囲を広げて1～10巻までのものを合せると全体の98.5%に達する。さすがに11巻以上の多巻ものになるとかなり限られている。100巻を越すタイトルは4点あるが、最高は *A catalog of books represented by Library of Congress printed cards.* である。

参考図書のタイプ別の巻数分布をみても、当然ながら、大部分のタイプで1巻ものが最も多い。1巻のものが80%を下回るタイプはむしろ珍しい方であり、四つのタイプが認められるだけである。すなわち、人名事典（1巻76.4%、2巻9.1%、1～5巻88.4%）、百科事典（1巻22.2%、10巻以上59.2%、21巻～30巻22.2%）、資料集（1巻61.5%、2巻15.4%）、数表（1巻66.7%、1巻～3巻94.5%）である。いずれも多巻ものとして刊行される傾向の強いものである。百科事典の巻数構成が最も分散しているのは当然といえば当然のことであろう。

7. 版次

参考図書の場、版次を重ねたものは、ある程度、内容的に信頼性を獲得したものとみなされている。そこで、次に、版次の面からコレクションを眺めることにしよう。版次は数字にせよ、文字にせよ、明示されているかどうかによって決めることにし、版表示として記載されていないならば、実際には、改訂版であっても、それは

無視することにした。

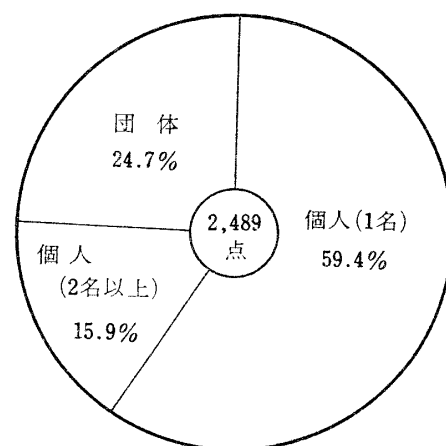
こうして得られた結果によれば、初版が全体の76.6%を占め圧倒的に多いことが明らかになった。これは、版次を重ねていないものでも、初版として処理したことによって、ことさら初版の点数が増えているともいえる。したがって、第2版、第3版、…と版次を重ねているタイトルの初版とみなされるものの点数はわずかなものになると思われる。

初版から第5版までに全体の約90%が含まれる。版次数の最も多いのが、*Dictionnaire Latin-Français* (Paris, Hachette) の54版である。また、版次を表わす数字もしくはは語によらない版表示（例えば、Rev. and enl. ed.）は114点（4.6%）ほど認められた。

8. 編著者

編著者のタイプは原則として閲覧目録カードの標目に基いて判断した。したがって、標目として団体名が選ばれている場合には、編著者として個人名が記載されていても団体名を採ることにした。また、改訂に際して編集を担当しただけの編者は無視することにした。以上の一般的な方針を決めたけれども、それでも各参考図書について個別に検討すると、団体名を採るべきか注記の個人名を採るべきか判断できかねるケースがないわけではなかった。したがって、編著者タイプのデータには一貫性を欠くきらいがあるので、第3図はこのことを念頭においてみる必要があるだろう。

第3図 編著者



注：タイプ不明の2点を除く

この図によれば、個人編集の参考図書が多いのは当然のことながら、団体による編集ものが4分の1近くを占めていることがわかる。この点は一般図書とは異なる参考図書の特徴のひとつといえるのではなかろうか。

次に、参考図書タイプの四つの大きなグループにおける編著者構成を調べてみた。第4図はその結果である

第4図 参考図書タイプ別編著者

書誌類 (N=776)	個人(1名) 54.8%		団体 28.7%
人名事典類 (N=258)	個人(1名) 31.9%	個人(2名以上) 12.5%	団体 55.6%
辞書類 (N=983)	個人(1名) 73.7%	個人(2名以上) 16.5%	9.8%
「その他」 (N=474)	個人(1名) 52.1%	個人(2名以上) 15.4%	団体 32.5%

注：編著者タイプ不明の2点を除く

が、ここで特に注目されるのは、辞書類をはじめとして、書誌類も、「その他」も個人(1名)によって編集されたものが50%以上を占めているが、人名事典類だけは個人(1名)によるものが30%強に過ぎず、逆に団体の手になるものが55%以上を占めている、という点である。こうした相違は各タイプの特徴の一端を示している。

9. 出版者

多くの場合、参考図書1点につき、一つの出版者が記載されているだけであるが、二つ以上の出版者が記載されている場合がないわけではない。この場合、最初に掲げられている出版者のみを今回の調査対象とすることにした。また、多巻もので出版者を異にしている巻がある場合には、最新の刊行のものを選択することにした。さらに、東欧およびソ連のものについては、その出版機構の実態を十分に把握できないため、分析対象から除いた。

出版者のタイプは第11表にみられるような類別にした。このような類別方法は、先進国については比較的容易にあてはまるが、開発途上国については民間部門か政府部門のいずれかに属するのか判断の難しいケース

がいくつかみられた。したがって、この点について不適切なデータが含まれている可能性は否定できない。

まず、タイプ不明を除いて、全体に占める比率をみると、商業出版社の63.2%が最も高く、これに大学出版部13.1%、民間団体9.3%と低い比率で続いている。この三つのタイプ以外はいずれも5%以下にとどまっている。

第11表は各出版者タイプにおける参考図書タイプの四つのグループの構成を示している。この表によると、商業出版社、政府・自治体、「その他」を除く残りの六つのタイプにおける比率は、一様に書誌類が最も高くなっている。特に、大学、各種図書館、民間団体における書誌類の比率の高さが目立っている。出版点数の一番多い商業出版社では、辞書類が全体のちょうど半分を占めて第1位である。

次に、参考図書のタイプを基準にして、出版者タイプの構成をみると、参考図書タイプの四つのグループのいずれにおいても商業出版社が第1位を占めている。しかしながら、書誌類の構成は他の三つのグループとは明らかに異なっている。というのは、書誌類において商業出版社の占める比率38.7% (294点)は、他のグループに占める商業出版社の比率(人名事典類55.9%、辞書類82.5%、「その他」69.0%)よりもかなり低くなっており、しかも、大学出版部、大学、民間団体における書誌類を合わせた比率45.5% (345点)を下回っている。このことは他の参考図書タイプのグループではみられない傾向である。

以上の結果から、出版者タイプについては、書誌類とそれ以外の三つのグループとの間には、明らかな相違が認められるようである。

B 逐次行行物

1. 参考図書のタイプ

第11表 出版者別参考図書タイプ

タイプ	書誌類	人名・機関	辞書類	その他	計
商業出版社	294 (19.4%)	142 (9.4%)	756 (50.0%)	320 (21.2%)	1,512 (100%)
大学出版部	135 (43.0)	12 (3.8)	119 (37.9)	48 (15.3)	314 (100)
政府・自治体	22 (36.1)	12 (19.7)	3 (4.9)	24 (39.3)	61 (100)
国際機関	31 (43.0)	12 (16.7)	7 (9.7)	22 (30.6)	72 (100)
大学	94 (86.2)	7 (6.4)	4 (3.7)	4 (3.7)	109 (100)
各種図書館	62 (79.5)	7 (9.0)	2 (2.5)	7 (9.0)	78 (100)
民間団体	116 (52.0)	59 (26.5)	16 (7.2)	32 (14.3)	223 (100)
個人出版者	5 (41.7)	1 (8.3)	5 (41.7)	1 (8.3)	12 (100)
その他	1 (9.1)	1 (9.1)	3 (27.3)	6 (54.5)	11 (100)
不明	0 (0.0)	1 (50.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	2 (100)

第12表 参考図書タイプ

タイプ	点数	%
書誌	131	34.8
年鑑	98	26.1
名鑑	55	14.6
統計集	32	8.5
人名事典	20	5.3
抄録	16	4.2
便覧	8	2.1
蔵書目録	6	1.6
カタログ	4	1.1
数表	2	0.5
辞書・事典	1	0.3
索引	1	0.3
シソーラス	1	0.3
その他	1	0.3
計	376	100.0

第12表は14の参考図書タイプを点数の多い順にあげたものであるが、この表と単行書の場合の第3表を比べてみると、逐次刊行物ではタイプの数も10も少なくなっており、新たに加わったタイプは年鑑と抄録の二つだけである。

このことは逐次刊行物の形態をとる参考図書は、絶えずデータや情報の追加・訂正を必要とするタイプに限定されてくることを意味している。これは、第12表で書誌、年鑑、名鑑、統計集といったタイプが上位を占めていることによって裏付けられるのではないか。

辞書類を除いた参考図書タイプの三つのグループの比率をみると、書誌類40.8%、人名事典類20.0%、「その他」39.2%である。辞書類にはわずか1点しか含まれていない。

2. 主題分野

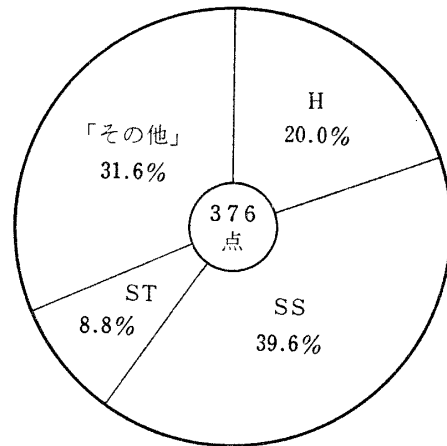
NDC主類により主題構成をみたのが第13表である。この表から、000と300の2分野の比率がともに30%台で、他の分野よりも飛び抜けて多く、単行書の場合に比べてその集中度の高いことが特徴的である。さらに、主題構成をNDC主綱レベルでみてみると、5%以上を占める主綱が四つ認められる。それらは、比率の高い順にあげると、050(逐次刊行物)の15.2%、370(教育)の15.2%、020(図書・書誌学)の9.6%、310(政治)の6.4%である。ここでも、単行書の場合と同様、教育が上位に入っていることが注目される。

次に、単行書の場合と同じ四つの大きな主題分野の比率を示したのが第5図である。これをみると、単行書の

第13表 主題分野 (NDC)

NDC主類	点数	%
000	119	31.7
100	23	6.1
200	27	7.2
300	142	37.8
400	9	2.4
500	14	3.7
600	17	4.5
700	9	2.4
800	8	2.1
900	8	2.1
計	376	100.0

第5図 主題分野

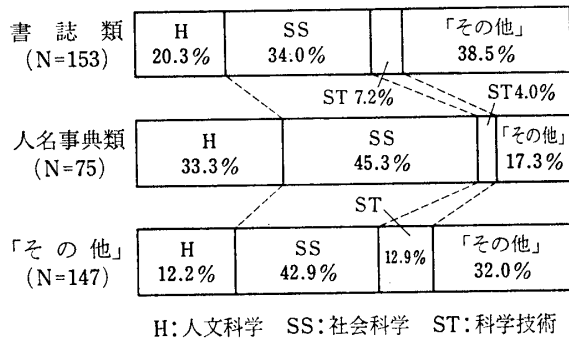


H:人文科学 SS:社会科学 ST:科学技術

場合と違って、人文科学(H)と社会科学(SS)の順位が逆転していることがわかる。単行書と逐次刊行物におけるこのような相違は、一般に社会科学では人文科学におけるよりも新しいデータや情報の必要度が高いことに起因するものであろう。ただし、科学技術(ST)は社会科学よりもさらに新しいデータや情報を必要とする分野であるが、ICUコレクションの性格上、それがここでの比率に表われていないと考えられる。

上記四つの主題分野を辞書類(1点のみ)を除いた参考図書タイプの三つのグループとの関連でみたのが第6図である。この図によれば、書誌類では主題分野「その他」が最も高い比率を占めているが、このことは一般的な性格の書誌が多いことを意味している。人名事典類では社会科学の比率が80%に近いが、その大半は名鑑(32点)で占められている。参考図書タイプ「その他」においても社会科学の比率が最も高いが、その半分近くが統

第6図 参考図書タイプ別主題分野



計集 (21点) と年鑑 (30点) である。同じく主題分野「その他」における参考図書タイプ「その他」の比率は32%であるが、その大部分は一般的な年鑑 (46点) で占められている。

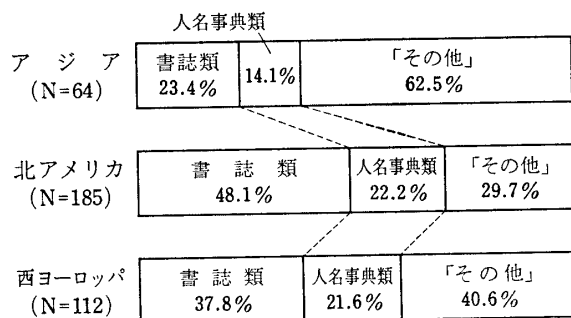
3. 出版国

出版国の内訳を示した第14表をみると、アメリカ合衆国が全体の半分に近い47.2%を占め、単行書の場合とほぼ同率である。また、イギリスの第2位も単行書の場合と同じである。ただ、単行書の場合と異なる点は、第3位に日本が位置していることである。

出版国を地域にまとめてその比率をみると、北アメリカと西ヨーロッパの2地域で全体の約80%を占める。ただし、比率の点からすると、逐次刊行物では単行書の場合よりも西ヨーロッパの比率が低く、アジアのそれが高くなっている。また、ブロック別 (日本を除く) にみても西側先進国に80%近くが集中し、他は開発途上国10.1%、東欧・ソ連は1.3%、と低率である。

特に出版点数の多い上位3地域について、辞書類を除いた参考図書タイプの三つのグループの構成を示したのが第7図である。これによると、アジアと西ヨーロッパの2地域では、「その他」の比率が最も高い。この点をさらに詳しく調べてみると、アジアでは年鑑(30点)、西ヨーロッパでは年鑑(25点)と統計集(15点)の二つが特にきわだっている。

第7図 地域別参考図書タイプ



第14表 出版国

国名	点数	%
日本	27	7.2
韓国	0	0.0
中国	1	0.3
香港	2	0.5
フィリピン	7	1.9
インド	7	1.9
その他	20	5.3
アジア小計	64	17.1
アメリカ合衆国	177	47.2
カナダ	8	2.1
北アメリカ小計	185	49.3
イギリス	44	11.7
西ドイツ	18	4.8
スイス	3	0.8
フランス	21	5.6
ベルギー	2	0.5
オランダ	4	1.1
スペイン	1	0.3
イタリア	13	3.4
その他	6	1.6
西ヨーロッパ小計	112	29.8
北ヨーロッパ	1	0.3
ソ連	0	0.0
東ドイツ	3	0.8
その他	2	0.5
東欧・ソ連小計	5	1.3
オセアニア	7	1.9
ラテン・アメリカ	1	0.3
アフリカ	0	0.0
総計	375	100.0

注：不明の1点は除く

4. 使用言語

書誌と索引の二つの参考図書タイプを除いた238点について、その使用言語の分布をみたのが第15表である。この表から、逐次刊行物においては、単行書の場合よりも一層英語に集中していることが明らかである。また、言語の種類は単行書よりも減少している。

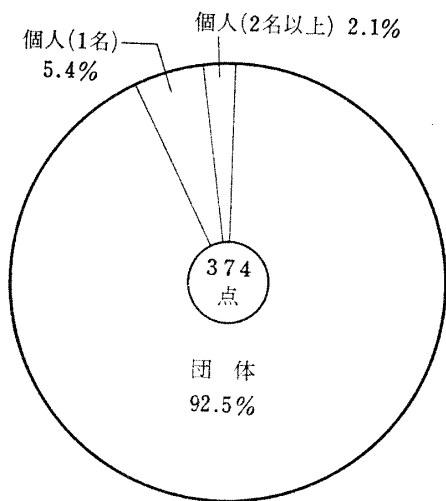
5. 編著者

編著者を三つのタイプに分け、その比率を円グラフで

第15表 使用言語

言語名	点数	%
英語	195	81.9
フランス語	8	3.4
ドイツ語	7	3.0
スペイン語	1	0.4
その他	1	0.4
2か国語以上	26	10.9
計	238	100.0

第8図 編著者



注：不明2点を除く。

示したのが第8図である。これをみると、団体への高い集中がすぐに目につく。このような現象は単行書の場合と著しく異なる点であり、逐次刊行物の参考図書にみられる一般的な特徴のひとつとって差し支えないのではなかろうか。

6. 出版者

東欧・ソ連のものおよび出版者タイプ不明のものを除

いた358点を対象に、その出版者タイプを調べた。その結果、逐次刊行物と単行書との間に明らかな相違が認められた。すなわち、逐次刊行物では商業出版社の全体に占める比率が45.8%であり、単行書の63.2%に比べ低くなっている。その上、逐次刊行物の場合、大学出版部の比率がわずかに0.8%ときわめて低くなっている。一方、政府・自治体12.0%、国際機関14.2%、民間団体18.7%といずれのタイプにおいても単行書の場合の比率をかなり上回っている。

第16表は、出版者のタイプ別に参考図書タイプの三つのグループ(辞書類を除く)の構成を示したものである。これによると、政府・自治体と国際機関において参考図書タイプ「その他」がともに過半数を占めているが、その大半は統計集と年鑑である。結局、書誌類においては商業出版社、各種図書館、民間団体、人名事典類では商業出版社と民間団体、参考図書タイプ「その他」では商業出版社、政府・自治体、国際機関が主たる出版者であるといえることができる。

7. 創・終刊年

逐次刊行の参考図書について、創刊年および終刊年を *Ulrich's international periodicals directory* をはじめとするいくつかの二次資料を用いて調査した。それでも創刊年が確認できなかったタイトルが80点、終刊か続刊中か確かめられなかったタイトルは100点ほどあった。

まず最初に、創刊年の分布を10年単位でまとめてみたのが第17表である。この表の不明80点を除くと、1947年以降に創刊されたタイトルの比率は全体の70%以上に達する。最も古いタイトルは1809年創刊の *Official congressional directory, for the use of United States Congress...* である。

次に、終刊のものと同続刊中のものの比率をみると、376点のうち57点(15.2%)がすでに終刊となっており、219点(58.2%)が続刊中であつた。残りの100点(26.6%)

第16表 出版者別参考図書タイプ

タイプ	書誌類	人名・機関	その他	計
商業出版社	69 (41.6%)	44 (26.5%)	53 (31.9%)	166 (100.0%)
大学出版部	2 (66.7)	0 (0.0)	1 (33.3)	3 (100.0)
政府・自治体	4 (9.1)	8 (18.2)	32 (72.7)	44 (100.0)
国際機関	15 (29.4)	3 (5.9)	33 (64.7)	51 (100.0)
大学	5 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (100.0)
各種図書館	24 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	24 (100.0)
民間団体	31 (45.6)	18 (26.5)	19 (27.9)	68 (100.0)
個人出版者	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
その他	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)

第17表 創 刊 年

年 代	点 数	%
1800	1	0.3
1840	1	0.3
1860	3	0.8
1870	4	1.1
1880	3	0.8
1890	6	1.6
1900	7	1.8
1910	6	1.6
1920	17	4.5
1930	26	6.9
1940	43	11.4
1950	79	21.0
1960	65	17.3
1970	35	9.3
不 明	80	21.3
計	376	100.0

第18表 刊 行 頻 度

刊 行 頻 度	点 数	%
週 刊	2	0.7
隔 週 刊	1	0.3
月 刊	24	8.1
隔 月 刊	5	1.7
旬 刊	20	6.7
季 刊	4	1.4
年 9 回	1	0.3
半 年 刊	9	3.0
小 計	66	22.2
年 刊	162	54.6
隔 年 刊	30	10.1
3 年 1 回	3	1.0
4 年 1 回	1	0.3
5 年 1 回	1	0.3
小 計	197	66.3
不 定 期 刊	34	11.5
総 計	297	100.0

についてはいずれとも確かめることができなかった。

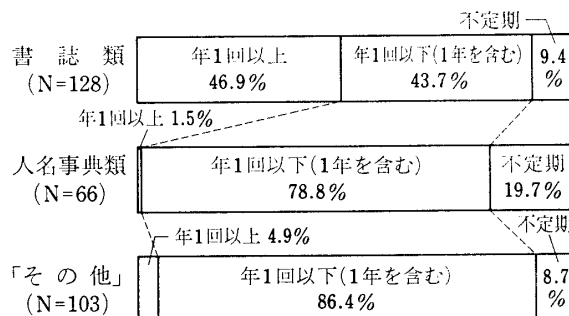
8. 刊行頻度

ここで刊行頻度というのは、累積版についてではなく、カレント版の最新の刊行頻度のことである。現物の直接

調査のほか、各種の二次資料を利用して刊行頻度を調べたが、それでもなお確認できなかったものが79点あった。これらを除く297点についての刊行頻度を示したのが第18表である。これをみると、全体の半分以上が年刊に集中していることがわかる。その他の刊行頻度の比率は、隔年刊の10%強を除いて、いずれも10%に満たない。

ここで、第18表のうち定期刊行物263点について、年1回以上の刊行頻度のものと、年刊を含めた年1回以下の刊行頻度のものに大別すると、その比率はそれぞれ25.1%と74.9%になり、前者は後者の3分の1である。これらに不定期刊行物を加えた三つの頻度グループが参考図書タイプの三つのグループ（辞書類を除く）において占めるそれぞれの比率を示しているのが第9図である。書誌類では刊行頻度が年1回以上のものと年1回以下のものの比率が同等であるが、人名事典および「その他」では年1回以下のものが大半を占めている。

第9図 参考図書タイプ別刊行頻度



9. 所蔵状況

1901年から1980年までの80年間にわたり1年単位で各年に刊行されたものの所蔵点数を調べたが、そのちょうど半分にあたる1941年以降の40年間の所蔵状況および継続状況を示したのが第19表である。

この表の見方については、若干の説明が必要であろう。まず、所蔵状況について、例えば1948年をみると、ICUではその年に刊行されたタイトル30点を所蔵している。その前年の1947年に刊行されたタイトルも30点所蔵しているので、この間の増減は0ということになる。しかし、1948年の30点は1947年の30点とは必ずしも同一のタイトルからなるとは限らない。というのは、1947年で終刊になったタイトル、あるいはそれ以降も刊行が続いていても図書館が1947年でそのタイトルの購入を中止したタイトル、さらには1948年刊のものがたまたま欠巻になっているタイトルなどが考えられるからである。また、新タイトルを1948年刊行の分から購入しはじめていることも考えられる。したがって、所蔵状況をタイトル数で示してはああるが、継続性については配慮していない

第19表 所蔵状況

年	所蔵					継続		
	H	SS	ST	その他	計(A)	増減	点数(B)	指標(B/A)
1941	3	7	0	4	14	-1	13	0.928
1942	3	7	0	3	13	-1	12	0.923
1943	2	7	0	5	14	1	11	0.785
1944	5	6	0	5	16	2	12	0.750
1945	4	7	0	7	18	2	13	0.722
1946	5	6	1	12	24	6	17	0.708
1947	5	9	0	16	30	6	21	0.700
1948	6	11	0	13	30	0	22	0.733
1949	10	16	0	11	37	7	23	0.621
1950	8	19	0	10	37	0	30	0.810
1951	10	19	2	12	43	6	34	0.790
1952	11	19	2	13	45	2	36	0.800
1953	12	20	4	17	53	8	36	0.679
1954	15	28	3	17	63	10	47	0.746
1955	16	25	3	18	62	-1	50	0.806
1956	15	30	5	25	75	13	55	0.733
1957	16	29	7	32	84	9	67	0.797
1958	16	36	8	36	96	12	76	0.791
1959	20	34	9	35	98	2	83	0.846
1960	22	38	12	34	106	8	88	0.830
1961	24	34	12	36	106	0	91	0.858
1962	25	39	13	41	118	12	93	0.788
1963	21	39	12	36	108	-10	97	0.898
1964	23	37	13	40	113	5	96	0.849
1965	24	39	10	44	117	4	96	0.820
1966	25	42	10	45	122	5	104	0.852
1967	28	41	11	43	123	1	105	0.853
1968	28	42	10	43	123	0	105	0.853
1969	27	36	10	44	117	-6	104	0.888
1970	25	33	8	42	108	-9	102	0.944
1971	23	30	8	45	106	-2	96	0.905
1972	23	30	8	48	109	3	96	0.880
1973	26	31	8	45	110	1	95	0.863
1974	24	34	9	49	116	6	97	0.836
1975	26	35	9	40	110	-6	97	0.881
1976	26	32	8	37	103	-7	99	0.961
1977	25	35	8	41	109	6	97	0.889
1978	26	36	7	38	107	-2	99	0.925
1979	21	30	7	38	96	-11	88	0.916
1980	21	28	6	38	93	-3	92	0.989

ことを断わっておかなければならない。

以上の点を念頭において、第19表の所蔵状況を通観すると、他の年代に比べて特に1950年代に著しい点数の増

加（1950年から1959年までの増減は61点増）がみられる。この傾向を分野別にみると特に社会科学（SS）の増加が顕著である。このような増加の理由として、ひとつには出版物の増加が考えられようが、より大きな理由として、50年代はICUが設立された最初の10年に相当し、この間に図書館が積極的な収集を図ったことが考えられる。

また、所蔵点数のピークは1967年と1968年の123点であり、それ以後は下降線をたどり、1979年には100点を割っている。その理由を今回の調査では究明できなかったが、蔵書構築の上では問題のある事実である。

次に、継続性に配慮してその所蔵状況をみたのが継続性指標と仮に名づけたものである。この指標は、前年から継続して受け入れているタイトルの点数を各年毎に集計し、その点数を前述の継続性を配慮していない所蔵点数で割った値である。したがって、前年のタイトルをすべてそのまま当該年に継続して受け入れていた場合、その年の継続性指標は1.000になる。第19表の継続性指標を通観すると、1959年から1980年まで（1962年を除く）の指標は0.800以上を保っている。特に指標の低い年として1949年と1953年があげられよう。

ただし、ここで二つの点を断っておかなければならない。すなわち、第一に、刊行頻度が年1回以上のものについて、欠号があっても、少なくとも年に1回受け入れられたことがあるならば、その年には所蔵されているものとみなしていること。第二に、刊行頻度が1年に1回以下のものおよび不定期刊行物については、それが継続して受け入れられているならば、その間の各年に所蔵しているものとみなし、継続点数、所蔵点数に算入している。また、終刊になったタイトルについては特に考慮しなかった。こうした点で、厳密性を欠くきらいがあるの

第20表 所蔵年数

年数	点数	累積(%)
1	115	30.6
2	39	41.0
3	22	46.8
4	24	53.2
5	14	56.9
6 ~ 10	42	68.1
11 ~ 15	37	77.9
16 ~ 20	26	84.8
21 ~ 25	24	91.2
26 ~ 30	15	95.2
30 ~ 60	18	100.0

第21表 SHEEHY 収録タイトルとの合致

SHEEHY		ICU 所蔵点数				合致率 (%)		
分類	点数 (A)	同版 (B)	新版 (C)	旧版 (D)	計 (E)	B/A×100	(B+C)/A ×100	E/A×100
AA	945	61	13	12	86	6.5	7.8	9.1
AB	215	29	5	11	45	13.5	15.8	20.9
AC	89	17	3	1	21	19.1	22.5	23.6
AD	731	131	16	49	196	17.9	20.1	26.8
AE	232	18	0	4	22	7.8	7.8	9.5
AF	93	3	0	0	3	3.2	3.2	3.2
AG	124	6	2	1	9	4.8	6.5	7.3
AH	65	6	0	1	7	9.2	9.2	10.8
AJ	310	56	0	3	59	18.1	18.1	19.0
AK	138	2	0	1	3	1.4	1.4	2.2
小計	2,942	329	39	83	451	11.2	12.5	15.3
BA	93	18	0	2	20	19.4	19.4	21.5
BB	408	62	2	6	70	15.2	15.7	17.2
BC	133	17	1	3	21	12.8	13.5	15.8
BD	1,102	94	1	27	122	8.5	8.6	11.1
BE	245	19	1	1	21	7.8	8.2	8.6
BF	130	1	0	0	1	0.8	0.8	0.8
BG	149	4	0	2	6	2.7	2.7	4.0
BH	199	14	1	1	16	7.0	7.5	8.0
小計	2,459	229	6	42	277	9.3	9.6	11.3
CA	96	19	1	7	27	19.8	20.8	28.1
CB	249	55	3	8	66	22.1	23.3	26.5
CC	170	16	0	2	18	9.4	9.4	10.6
CD	75	11	2	0	13	14.7	17.3	17.3
CE	20	1	2	1	4	4.0	15.0	20.0
CF	63	3	1	2	6	5.8	6.3	9.5
CG	244	20	0	2	22	8.2	8.2	9.0
CH	509	23	5	8	36	4.5	5.5	7.1
CJ	313	36	3	11	50	11.5	12.5	16.0
CK	252	31	1	1	33	12.3	12.7	13.1
CL	272	11	1	7	19	4.0	4.4	7.0
小計	2,263	226	19	49	294	10.0	10.8	13.0
DA	152	16	1	5	22	10.5	11.2	14.5
DB	263	13	3	2	18	4.9	6.1	6.8
DC	386	9	0	1	10	2.3	2.3	2.6
DD	112	1	0	0	1	0.9	0.9	0.9
DE	199	45	3	4	52	22.6	24.1	26.1
DF	24	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0
DG	29	6	0	0	6	20.7	20.7	20.7
DH	11	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0
小計	1,176	90	7	12	109	7.7	8.3	9.3
EA	262	21	1	13	35	8.0	8.4	13.4
EB	55	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0
EC	201	6	0	3	9	3.0	3.0	4.5
ED	103	7	1	8	16	6.8	7.8	15.5
EE	204	1	0	0	1	0.5	0.5	0.5
EF	66	4	0	3	7	6.1	6.1	10.6
EG	51	4	0	2	6	7.8	7.8	11.8
EH	79	11	1	2	14	13.9	15.2	17.7
EJ	349	5	0	1	6	1.4	1.4	1.7
EK	234	0	1	3	4	0.0	0.4	1.7
EL	94	1	0	0	1	1.1	1.1	1.1
小計	1,698	60	4	35	99	3.5	3.8	5.8
計	10,538	934	75	221	1,230	8.9	9.6	11.7

で、この継続性指標からすぐさまICU図書館の蔵書構築について評価を下すことは慎むべきであろう。

さらに所蔵状況に関連して、タイトルのそれぞれの所蔵年数(累計)を調べた。その結果、第20表にみられるように、1年分だけ所蔵しているタイトルの比率は30%強であり、1年から4年までのものを合せると半分を越える。最も所蔵年数の多いのは*Japan Christian Yearbook* (Tokyo, Kyobunkan) の60年である。

このような所蔵年数の分布から蔵書構築について意味のある評価を引き出すことは難しいが、ただひとつ確かなことは、1年分だけのタイトルが多ければ多いほど、継続的収集という面で問題があるといえよう。ただこの場合でも、最近購入を開始したために、まだ1年分しか受け入れていないタイトルがあることを考慮する必要がある。

C SHEEHY 収録の有無

参考図書の代表的な解題書誌として知られている Sheehy 編 *Guide to Reference Books*¹¹⁾ (以下 Sheehy と略す) に収録されているタイトルのうちICU図書館が所蔵しているタイトル数(単行書と逐次刊行物)を調べ、Sheehy の分類別に示したのが第21表である。

まず、この表の検討に入る前に、Sheehy の五つの主分類における合致率(Sheehy 収録タイトル中、ICU図書館がそれと同版か、またはそれより新版のかたちで所蔵しているタイトルの占めるパーセント)を同版と新版を合わせた比率でみると、A (General Reference Works) 12.5%、B (Humanities) 9.6%、C (Social Sciences) 10.8%、D (History and Area Studies) 8.3%、E (Pure and Applied Sciences) 3.8% という結果が得られた。

これら五つの主分類の下位分類におけるタイトルの合致率(同版のものだけ)を第21表でみると、20%を越えているのは、CB (Education)、DE (Asia)、DG (Oceania) の3分野だけである。また、同版と新版を合わせた合致率をみると、上記の3分野に加えて、AC (Encyclopedias)、AD (Language Dictionaries)、CA (General Works) の3分野が20%以上となっている。さらに、同版、新版、旧版を合わせた合致率も第21表に示してあるが、この比率はタイトルの重複(例えば、同一タイトルが同版と旧版の両方の点数に算入されているケース)が多くみられるので適切なものとはいえない。

一方、合致率の低い分野をみると、DF (Australia and New Zealand)、DH (Arctic and Antarctic)、EB (Astronomy) の3分野についてはICU図書館はSheehy 収録タイトルを1点も所蔵しておらず、BF (Applied

第10図 ICUレファレンス・コレクションに占める SHEEHY 収録タイトル

1973年以前の タイトル (N=2479)	SHEEHY 収録なし 53.4% (1323)	旧版 8.9% (221)	
		同版 36.6% (908)	新版 1.1% (27)
1974年以前の タイトル (N=2562)	SHEEHY 収録なし 54.0% (1383)	旧版 8.6% (221)	
		同版 36.1% (926)	新版 1.3% (32)

Arts)、DD (Africa)、EE (Earth Sciences) の3分野の合致率は1%以下である。

全体でみると、同版のものについてICU図書館はSheehy 収録点数全体の8.9% (937点) 所蔵しており、これに新版のものを合せると9.6% (1,009点) 所蔵していることになる。

最後に、単行書と逐次刊行物を含めたICUレファレンス・コレクションに占めるSheehy 収録タイトルを1973年までに刊行されたものと1974年までに刊行されたものについて調べてみた。1973年と1974年で区切ったのは、Sheehy (1976年刊)の収録対象が1973年までに刊行されたものを中心とし、それに1974年刊行のタイトルを若干加えているからである。

第10図をみると、1973年時点と1974年時点におけるSheehy 収録タイトルのコレクションに占める比率はほぼ同じである。ただし、点数をみると1974年時点では1973年時点よりも同版で18点、新版で5点ふえている。

おわりに

国際基督教大学図書館のレファレンス・コレクションについて、洋書の参考図書を取りあげて量的把握を試みた結果、同大学の特色、学科構成などが、その選択にも強く反映していることが伺える。特に、人文科学分野の参考図書が比較的充実しているが、そのなかでも言語辞書が目立っている。

その反面、科学技術分野、社会科学分野において欠けるところが多いともいえる。また、洋書のうちでは英文図書(特に、アメリカ合衆国で出版されたもの)が圧倒的に優位を占め、刊年の面からみると、同館の創設以来の歴史が浅いこともあって、1950年以前の出版のものが少ない。この点は、単行書については比較的問題はないが、逐次刊行物形式の参考図書による遡及的探索の際に支障をきたすことになろう。

ただし、このような単一館のみの調査によっては、そのコレクションの評価を軽々に論ずることはできない

し、基本的参考図書は何かについて言及することもできない。

したがって、これらの点については、現在われわれの手で進めている他大学図書館における同様の調査の結果が得られた段階で、改めて検討することにした。

この調査の実施に当たって、国際基督教大学図書館、特に同図書館の阪田蓉子、石川幸雄氏、独協大学の常盤繁氏、ならびに東京大学大学院図書館学専攻の院生諸氏から多大の協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

注

- 1) 長沢雅男, 常盤繁「大学中央館における参考業務の実態」『東京大学教育学部紀要』第18巻, 1979, p.101-17.
- 2) *Ibid.*, p. 111-3.
- 3) *Ibid.*, p. 103.
- 4) Katz, W. A. *Introduction to reference work*, Vol. II, Reference sources. New York, McGraw-Hill, 1969, p. 108.
- 5) Blakely, Florence. "Perceiving patterns of reference service", *RQ*, vol. 11, Fall 1971, p. 33.
- 6) Coleman, Kathleen and Dickinson, Pauline. "Drafting a reference collection policy," *College and research libraries*, vol. 38, May 1977, p. 227-33.
- 7) *Ibid.*, p. 229.
- 8) 1977年度の調査(長沢, 常盤, *op. cit.*, p. 110.)によれば, 参考質問処理件数(平均)は国公立で3,628件, 私立で2,665件であったが, ICUでは, 1979年度に3,067件を処理している。学生数に対する比率を考慮すれば, 著しく高率である。
- 9) 長沢, 常盤, *op. cit.*, p. 112.
- 10) *Ibid.*, p. 113.
- 11) Sheehy, E. P. *Guide to reference books*. 9th ed. Chicago, A.L.A., 1976. これには各主題分野の主要な参考図書(洋書)がほぼ網羅されていると考えてよい。

